しい特色をなしてゐるのを擧げたい。たゞ最後に一言したいのは氏が古代の藝術問題、社會問題等を取扱つてゐるものゝ中には、當識の域を大いに出でない論述が散見する事であつて、之等は將來改めて、我々がより深い考古學的立場から考察す可きであらう。

（菊版本文二九六頁、圖版十二葉、昭和十六年東京葦牙書房發行）

（藤岡謙二郎）

朝鮮の建築と藝術

關野　貞著

工學博士關野貞先生の沒後、門下の諸氏によつて編まれつゝある故博士の論文集の第三卷として、今回「朝鮮の建築と藝術」一卷の出版を見たことは、はるかに先生の遺德をしのぶ者ばかりでなく、廣く學界のためにも慶賀すべき事である。

關野博士が優れた建築史家であられたことは餘りにも世に聞こえて居り、建築史や藝術史の領域にいち早く考古學的資料を利用し援用して、自から一つの學風を建てられた事を記憶する者もまた少しとせぬであらう。しかし、更に博士が他の諸方面の學者にさきがけて、――まだ當時は韓國と言はれてゐた時代より――朝鮮半島の各時代の古蹟をあまねく踏破調査し、その顯彰保存に率先盡力せられた偉大なる業績を有せられることを知るものは、或は多くないかもしれない。

今日では誰知らぬ者とてない樂浪の古墳群、輯安の高句麗遺跡、或はまた平壤附近の高句麗壁畫古墳や慶州の新羅時代諸遺跡など、それらのすべてが先生の手によつてはじめて調査せられ、或ははじめて報告せられたものであることを、當時の先生の筆になる本書に收錄せられた諸篇は、しみ〴〵と思ひかへさせるのである。その意味において、先づ本書はかの『朝鮮古蹟圖譜』十卷と共に、朝鮮考古學界の開拓者として關野博士の名を永久に傳ふべき記念塔となるであらう。

第二に思はれることは、例へば本書の主要な部分を爲す「朝鮮美術史」をはじめとし、すべてに示された、行くとして可ならざるなき博士の鑑識の廣さである。都城を論じ墳陵を說き、建築彫刻繪畫はいふに及ばず、金石陶瓦あらゆる種類の工藝にも隨時筆を及ぼさるゝばかりでなく、時代の新舊によつて專門を限らず、資料の一つ一つが博士自身の眼によつて位置づけられ、前後の時代との關係のうちに眺められてゐるといふこと、それは將に驚くべくも豐富な教養の所產である。文は人なりといふ。恐らくは博士の學風であり人格であつたらうと思はれる、堅實な態度のうちに包まれた熱情が活字の間におごそかな光を放つのが感じられる。

本書に收められた長短二十四篇の研究は、二三を除いて大部分が明治の末年から大正年中に公にせられたものである。博士によつて始められた朝鮮の考古學的研究は、爾後、殊に近時の十年餘の間に長足の進步をとげた。嘗ては關野博士が不十分な資料によつて論じられた處を、今は豐富な知識を以て補ひ得ることも多いのである。併し如上の由來を顧みるに於て、その樣な見地から本書の內容に對して兎角の言を爲すことは不遜であらう。しかも、わ

れ〳〵は豐富なる新資料を網羅した新しい「朝鮮美術史」の出現を、待つこと久しくして未だその望を果たさない現狀に於いて、本書の刊行は單なる記念的出版としてゞはなく、大いに讀書界を益すべきものあるを疑はぬ所以である。

なほ、本書の各篇の形成については、博士の遺された類似の諸論文中よりそれ〴〵詳細なる部分を採取し、決定版の作成ともいふべきものとした編者藤島亥次郎氏の多大なる努力がはらはれてゐることを附記すると共に、資材の關係であらうが、既刊の二卷に比してやゝ印刷の不鮮明さが感じられることを書肆に對して特に本書の爲に惜しみたい。（菊版七五八頁、圖版十二頁、定價七圓、岩波書店發行）（小林行雄）

彙　報

東洋史談話會

例會　九月二十七日(土)午後一時半より樂友會館第六號室に於て開催、那波教授、宮崎、田村兩助教ほか學士、學生多數出席、左の講演をきく。

北支と中支　日比野丈夫氏

楊貴妃の素性について　岡本午一氏

十月九日(木)午後六時半樂友會館第六號室にて開催。

女國と蘇毘　佐藤長氏

支那に於ける孝道と佛教　宮川尙志氏

東方文化研究所公開講演

東方文化研究所に於ては今學期に入つて左の講演を行つた。場處は同所講堂。

十月十一日(土)午後一時半より

五臺山の現在と過去　助手　日比野丈夫氏

唐代曆法に及ぼしたる西方の影響　研究員　藪內清氏

西洋史讀書會

例會　昭和十六年度第三回例會を十月八日午後六時より於樂友會館開催、原教授、井上、前川の兩講師を始め參會者二十五名。

一、Rostovtzeff: Social and economic history of the Roman Empire.　二回生　市川承八郎君

一、F. Meinecke: Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte　中山治一君

地理學談話會

例會　十月二十五日(土)午後二時より實習室に於て開催、出席者二十八名。

一、一回生旅行報告

蒙疆　伴豐氏

ボナペ島　川喜田二郎氏

一、興亞地理教育私見　吉田敬市氏